

---

# 金融王の旅団【お題スレ】

まめ太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

金融王の旅団【お題スレ】

### 【Nコード】

N1494W

### 【作者名】

まめ太

### 【あらすじ】

2chお題スレのお題、「食べ物」です。

大航海時代的な海洋冒険小説とか、人生ゲームDX的な金儲け大富豪物語とか、そのあたりの風味を意識してみました。

陰謀渦巻く中で駆け引きとか謀略とか、登場人物「女は愛嬌、男は策謀」とか悪い男と悪い男が結託したり敵対したりとか、そんな話。恋愛模様は大荒れ。

## プロローグ

大海原には鷗が群を為して魚影を追っていた。

六隻の帆船が船団を組み、真つ白な波を切り分けて突き進んでゆく。空は青く、水平線と遠くで溶け合うように薄い水の色に変わっていた。

なんの問題もない航海。そのはずだったのは先刻までで、今は不安な要素が船団の影に付き従っている。群なして泳ぐルビーフィッシュ。

額の赤い大きな宝玉が、この深海に潜む獰猛な魔獣のトレードマークだ。鮫に似ているが、額のルビーが彼らの瞳であり、一つ目の怪魚は船に危険を知らせる警報である。

問題は彼らではない。

彼らは呼び寄せられたただ、さらに厄介な魔獣の襲撃でこの船団から大量に出るだろうおこぼれを貰うために。

海に潜む危険は、およそグリーン・デビルかシー・ブrouと相場は決まっている。

巨大な鳥賊と言っていいグリーン・デビル、一角鯨とも呼ばれるシー・ブrouは魔法を使う。彼らの魔法に術式は必要でなく、体内の魔力をそのまま攻撃スペル同様に撃ち出すのだ。

魔法は、人型のみ許された特権などではない。

「来るか!？」

誰かが叫んだその時、海面に白い影が浮き出た。巨大な白いトライアングル、これはグリーン・デビルが出現する際の特徴だ。

三つの光源が海面に筋を引き、正三角形を形作る。原始的な、しかしパワーは桁の外れた魔獣の仕掛ける魔方陣だから、複雑な式は必要でない。海面の青が黒く染まる。やにわに白くなった。くつき

りと魔獣の形を映し出している。

「魔法弾を用意しろ！ ありったけ、ぶち込んでやれ！！」

影はかなりの大きさを示している。およそ、この船団の一隻と同じほどはあるか。クラーケンには火炎が有効だ、魔獣全般に驚異的なダメージを与えるフレイム・シードの魔法を詰めた砲弾が、船倉から次々と運び出される。場は異様な熱気に包まれた。

水飛沫が大量に甲板へとなだれ、悪魔の振るう腕が波を割って次々と船団に襲い掛かった。

「鳥魔部隊に出撃指示！ マストを頼む！」

出撃指令に反応した特殊なクルー達が甲板を走り、身に着けた衣装を脱ぎ捨てる。上半身を晒さなければ、俺たちバードマンは飛べない。

俺も倅い、上着を捨てた。普段は隠しているこの翼が、この身のどこへ収まっているものか、それは俺たちバードマン自身にも解からない謎だ。

明らかに自身より大きな両翼を広げ、一気に飛翔した。加速を得るため錐揉み状で上空へ。

姿を見せた白い悪魔は、丸太ほどもある触手を伸ばし、二艘の船を同時に絡め取っている。ゆっくりと残る触腕がマストへと這い登る。

悪魔の胴体は海面の波に揺られ、名の由来通りエメラルドの輝きを反射する。水から出た一部の身体に向けて魔法弾が雨となるほど撃ち込まれていく。

海面は火の海。魔道士数人が駆け回り、船体を守るために氷結魔法を撃ち込んでいる。

俺も自分の仕事をしなければ。

マストに絡み、へし折ろうとする触手の吸盤を切り落とし、敵の力を削ぐのだ。筋肉の繊維を断ち切ることで、簡単に吸盤は吸い付ける力を失う。余力があれば、触手自身を切り落とす。

愛用のククリナイフを触手に突き入れ、力をこめて捻り、切り裂く。

「リグ！ 海面に落ちたマヌケを頼む！」

「了解！」

ちっ、……誰か落ちたらしい。早く見つけないと鮫の餌だ。魔道士が波間に見えた。

ルビーフィッシュがゆったりと回遊している。防御魔法で凌いでいるが、連中には無駄な足掻きに過ぎない。一つ目がチリチリと雷撃を蓄え始めている。

「掴まれ！」

翼を極限まで折りたたみ、錐揉みで急行した。間一髪。引き上げたと同時に海面がスパークした。

火炎が、ようやく悪魔の瞳を焼き潰した。

クラーケンは鈍感な魔獣で、深手を負わない限り攻撃されている事に気付かない。いきなり、十本の触手すべてが硬直したように天を向き、それから派手な水飛沫を上げて海面に叩きつけられた。

ようやく、大火傷をしている事に気付いたのだ。泡を吹きながら、急速に海底へ沈んでいく。

ルビーフィッシュもまた動き出した。

連中の狙いは海戦によるおこぼれだ、沈んでゆく巨大烏賊を追って渦を巻きながら姿を消した。

瀕死の獲物は、それが海神であつても奴等には単なる餌だ。海底の黒い闇の中に、幾度か白いラインが放出された。グリーン・デビルが煩い鮫どもから逃れる為に移動魔法を使用したのだろう。

危険が過ぎた事を確認してから、俺はマヌケな魔道士を乱雑に放り落とし、翼を仕舞いながら着艦した。毎回、毎回、平穩に航海出来た試しがないな。

「リグ、お疲れさん！」

「あ、有難う御座います、マイヤー卿、」

同業とさつき助けた魔道士が同時に喋った。何を言ったのか聞き取れん。

マイヤー卿。

そうだ、先日、互いの利害が一致してマイヤー提督の養子になった。名前がリグ・マイヤーに変わり、近衛海軍の少将を拝命したが、そちらの仕事をするつもりは毛頭ない。

俺は利益のみを追求する商人だ。提督は潤沢な政治資金を求め、俺は政治介入の足掛かりを得るために、あの日、手を結んだ。レイティア聖騎士団領、十二騎士の一角、マイヤー候爵アルフレッド・マイヤー海軍元帥と。俺の、義父ということになる。……あの狸ジジイが。

俺はジジイから見れば若造で、一言でいうなら、「してやられた」のだ。

## プロローグ（後書き）

補足説明：

名前、リグ。種族、バードマン。年齢、もうすぐ三十路。

バードマンは男だけで女はハーピー。気性が荒い種族で、海賊などに多い。両腕、手首の付け根に戦爪と呼ばれる角状の第六指があり、翼を隠していてもこれだけは消せない特徴として残る。南国に広く生息する魔族。大きな翼を体内に収納出来る者もいるが、どのようにして収まっているのかは、本人達すら知らない。世界七不思議の一つ。

本編主人公もこのタイプ。緊急時には翼を出してトンズラ。

世界観：

刻印小説にある、時空の螺旋構造に収納された宇宙の一つ。近接してLEGEND世界が存在するため、両者の世界は似通っている。離れているので、刻印小説などとは世界がまるで違っている。

## その1

大小の島々からなるリユースト海域。温暖な気候で豊穡な土に恵まれた島々には沢山の集落がある。歴史の中でそれぞれが纏まり独立国家が生まれ、いつしか全体で統一通貨を持つ連合国を形成した。通貨はG<sup>キル</sup>。

諸島の端に位置する島で船を降りる。船団はこのまま諸島の別の港を目指して出発する。その為のしばしの停泊だ。船のタラップから複数の船員が港へ降り立つ。その後ろから商人たちが。壮年ばかりの集団にまじって俺も船を降りた。先日助けた魔道士も兼業商人だ。集団の中に居て、しきりに俺に頭を下げている。騎士団領は兼業商人だらけの国なのだ。

まずは先に降ろされた積荷を点検し、積み替えの作業を監督する。一部の荷はここで買い手に渡し、半分ほどに減った荷を貸し倉庫へと移すのだ。後日、別の船に積むために預けておく。他の商人たちと歓談しながら、人足たちが働く様を時折気に掛けつつ窺っていた。大事な積荷をぞんざいに扱われては堪らない。

湾岸に開けた中規模の港町。大陸に向かう船は港を幾つか経由して大海原へと旅立ってゆく。中継の要地とはなれなかったせいで、この辺りの村は総じて発展しなかった。小さな村落が港の周囲に点々と存在する。馬車で半日も走ればそれらの村に到着した。

港からもっとも近い位置に有りながら、宿泊予定地であるその村の雑貨屋は一軒のみだ。港に近いという事は、もっとも発展しているべき場所という意味を持つ。実情として、この辺りは港を含めた一帯が田舎だということだ。石鹸や細々とした生活用品はこの店にしか置いていない為、ここが潰れると村人はたちどころに困ってし



まうだろう。

老夫婦が切り盛りしていたが、数年前に主人が倒れ、亡くなったと聞いた。以後は未亡人となった婦人が店を開けている。俺は半年に一度、この店を訪れ商品を卸している。

港から港へ、この村は少しばかり足を向ければ良い距離だから、事のついでで販売ルートに入れていた。名前が変わってからは、今回が初めての寄港になる。面倒だから話すつもりはない。

積荷の運び屋、トランスポーターという職業は危険が伴うせいで為り手は少ない。産地で買い付けた商品を別の土地へ運んで売り捌く仕事だが、この世界にはどこにでもモンスターが沸くせいで、実入りがいいとは言い難い。見込んで仕入れた品がさっぱり人気が出なかったという事もある。

運び屋は、同時にバイヤーを兼ねる者が多く、俺もそうだ。常に、売れそうな品を嗅ぎ回っている。

多くの国では自給自足が原則だから、運び屋という職が必要不可欠というわけでもない。それでも、珍味や海外の特産という贅沢品には一定の需要があつて、なんとか成り立っていく。

一発当てて大金持ちになるケースなども、ないわけではない。肩唾の類が多いけれど。

俺は今、村へ向かっている。馬車は自前ではなく港で借りた。幌の付いたものは雨風を凌ぐにいいが、料金が高い。幸い、空には雲一つありはしないから安い方で間に合うだろう。荷車に簡単な御者席が付いただけの荷馬車だ。車輪が時折軋んだ音をたて、馬のひずめが土を蹴りつける音が響く。

港町の、潮に吹き晒された町並みが、豊かな田園風景に変わる。この辺りの特産はオリーブだ。広大な農園地帯は緑の縦縞模様を描いて、背丈の低い深緑の樹木が行儀良く植わっている。

雑貨屋に細々とした品を売る反面で、このオリーブを大量に買い

付ける。本来なら一年に一度訪れるだけでも良かった。

オリーブは村で加工されてオイルになる。二度絞れるところを、一度目のヴァージンオイルだけを買い付けて運んでいる。大陸の都市へ。風味がまるで違うから高値で取引出来るのだ。この辺り一帯で生産されるオイルをすべて独占する事で純利益は莫大なものになる。

各家庭の家内工房で作られるそれらの品を、雑貨屋の夫人が取り纏めてくれる。持ちつ持たれつという話で、俺は半年に一度この村を訪れる約束をしていた。定期便は毎月人に任せて送っている。

その店が、最近になって妙なことを始めた。

大きな街や都市に行けば幾つかは見かけるその看板、雑貨屋は兼業で喫茶店などを始めたのだ。

こんな小さな村で、外食産業など流行るわけがないのに。

街道のすぐ傍に雑貨屋がある。村の入り口付近に位置して、畑に囲まれた中に煉瓦造りの家屋が一軒ぽつんと建っている。屋根も茶色い板葺きで、全体的に赤茶色の建物には蔦が絡み付いていた。亭主が亡くなって、かなり手入れが杜撰になったようだ。

だが、店舗のある左半分の壁だけは蔦が切り払われて、綺麗になっていた。改装の跡がある。

馬車を店の前で止めた。改装したばかりの小さな扉が開く時にはベルの音が響いた。

ひずめの音で来客に気付いたのだろう、俺が馬車を降りる前に店の扉が開かれた。

「いらっしやいませ！」

少女が勢いよく飛び出してくる。アヤカだ。

「なあんだ、リグだったの。お客様かと思ったのに。」

「ご挨拶だな。」

あまりの言いようだから、つい不機嫌な表情を表に出してしまっ

た。

こんな小さな村落で、養母の迷惑も顧みずにお店ごっこを始めた張本人が、俺を見て頬を膨らませて拗ねている。アヤカは迷い子だ。この近隣では見えないような黒い髪と、黒に近い鳶色の瞳をしていた為、悪い精霊ではないかと疑われた娘だ。本人は二ホンという国から来たと言っているが、世界中を旅している俺でも、そんな国の名は聞いたことがない。

アヤカはエルフのように肌が白く手足が細い。まったく体力が無く山に登った程度で音を上げるし、生水を飲んだだけで腹を壊す。けれど、目が大きく小顔であり歯並びの整った綺麗な顔をしている。美人は得だ、村の荷物とされながら、誰も邪険に扱わない。性格が良い、というのが一番の理由だが。

ワンピースの上に白いエプロンを付けて、サンダルを履いている姿は何処にでも居る普通の女の子だが、拾った当時は変な服を着ていたものだった。真っ黒い服で。

## その2

「ばあさんは？」

「おばあちゃまは今朝から寝込んでるわ。持病の腰痛がいよいよ悪いらしいの。なにか良い薬があったら、お願い。50Gくらいなら、なんとか買い続けられると思うから。」

馬車を降り、荷物の幾つかを纏めて抱えながら要望を聞いた。三つの荷が今回卸す依頼品だ。薬品の類は、残念ながら頼まれていない。

ふと思いつくことがあって、提案してみた。

「薬草なら西の山岳地帯に自生してるはずだ。調合方法を教えてやるから、作ってみるといい。今夜は泊まっていくから、明日の朝、準備を整えたら起こしに來い。」

ポピュラーな温湿布の製作方法など簡単なものだ、数種の薬草を刻んで練り、患部に広げて塗るだけでいい。そのくらいはこの国の人間でも知っていそうなものだが、アヤカだけは特別だ。

特別に、何も知らない。無知とっていいほどこの少女は物知らずだった。

「今回はゆっくりしていけるのね！じゃあさ、試食してほしいものがあるんだけど、ご飯はもう食べた？」

いや、まだだ、と答えるとアヤカは満面の笑みを作って、素早く店の中へと駆け込んでいった。

彼女はくるくるとよく動き回って、元気だ。無知といえるほど物知らずのくせに、誰も知らない事を知っていたりする。海で獲れる気持ちの悪い八本足が食えることとか。……割と美味しいこととか。

店に入ってみると、職人の丁寧な仕事がまず目に止まる。以前はなかった大きな窓が三つ、天窓と合わせて、室内を明るく照らして

いる。俺が以前に運んだ荷物は片隅に追いやられ、二つのテーブルとカウンター式のキッチンが代わりに場所を占有していた。……雑貨屋、のはずなんだが。

この付近の大工職人は港町に住んでるエディしか知らない。細部に至るまでがとても丁寧で良い仕事だが、恐らく、アヤカが注文したものをそのまま再現してのけたんだろう。良い所を見せようとして。

真新しい白木の香りが心地良い。室内は明るく、雰囲気も良く、ここでの食事は気分的にも美味しく感じられることだろう。赤と白のギンガムチェックに染められたクロスがテーブルに掛かっていて、窓際には四角い花器が置かれ、かすみ草が活けられている。

テーブルの上には見慣れないパンが置いてあった。テーブルクロスの上に皿が一枚きり置かれて、その上に丸いパンが無造作に乗せられている。椅子を引き、席に着いて改めて身構えた。深呼吸が必要だ。

僅かばかり躊躇するものの、意を決してパンを手取る。

以前、何も知らずにかぶりついたら、中から熱いグラタンが出てきて酷い目に逢ったのだ。

ピロシキとか言っていたか。アヤカには何を食わされるか解からないから、用心しないとイケない。しばらく考え込んでいたら、彼女が傍に来て水の入ったコップを置いてくれた。期待の籠もる眼差しを背中に感じる。……仕方ない、俺はひそかに溜息を零した。

指先の感触では特別熱いわけでもなく、けれど裏を返した中央部にはなにか仕込まれていそうな怪しい穴がある。それ以外はごく普通のパンだ。覚悟を決めて口を開ける。一思いにとかぶりついたら、なんと奇妙な味が口の中いっぱいに広がってきた。じんわりと口内が痺れるほどの甘味。

評価が欲しいと訴えるアヤカの顔が、肩越しに覗き込んでくる。

耐えられないくらいの甘さに、口のを吐き出したくなつたがなんとか耐えた。

咀嚼もせずに水で流し込む俺に、表情で察したらしい彼女は残念そうな息を吐き出した。

「あ、やつぱり。リグは辛党だから無理かなーとは思つた。」

思つたんなら、出すな！ と、怒鳴りつけてやりたいところを抑える。これしきで腹を立てていては身が持たない、いや、大人気ないというものだ。子供のする事はワケが解からないものだ。なんとか感情を抑え付けて、呼吸を無理やり整えた。

それにしても、なんだろう、これは。

齧つた後の切り口から覗いて、ようやく正体が解かった。赤いジヤムの層に真つ白いクリーム層が重なっている。とんでもなく甘く感じたのはダブルだったせいらしい。

どうして甘いジヤムに甘いクリームを重ねるなどという発想が出てきたんだ。

「おばあちゃまや近所のマリネおばさんには好評だつただけだね。男衆のウケはあんまりよくないみたい。」

「俺の他にも犠牲者が居たか。こういう甘つたるいモノを喜んで食うのは、女子供だけだな。男でこういうものが好きな野郎はハンスくらいだろう。好きが嵩じて養蜂を始めたと聞くからな。」

「彼はパンケーキの方が好きみたい。口直しにハンバーガーはどう？」

「アヤカの提案に乗って、頷いておく。口ぶりから察するに、ハンスもダブル砂糖パンの犠牲者らしい。」

ハンバーガーという食べ物も、ここでしか食べた覚えの無いものだが、彼女の国ではとてもポピュラーなものだそうだ。

「ちよつと待っててね、すぐ作るから。」

「早いめに頼む。」

答えてから、席を立ち、カウンター越しに彼女の手際を拝見する。細くて白い指先が、慣れた手つきでレタスをちぎっていく。続いてトマトをスライスして、棚の中から容器に保存された半焼けのパテを一枚取り出した。ハンバーグの薄いもの、にしか見えないが、パテと呼ぶんだそうだ。

迷いなく動く白い手は、機能美を伴って、とても綺麗に見える。村の男衆がのぼせるのも道理だ。

パテをフライパンに放り込んだら、それぞれの具材を、最初に切ったんだろう丸いパンの半身上へと重ねていく。勢いよく水をきってから、レタスを乗せ、トマトの輪切り、こんがり焼けたパテ、乗せると同時に溶けはじめチーズ、自家製のピクルス、の順で重ねた。

「これはさっきのお詫び、ね。」

まだ熱いフライパンに、薄くスライスされたベーコンが二枚、放り込まれる。

これがカリカリに焼けて、半透明くらいになった脂の部分が光を反射すると、とても旨そうに見える。肉の焼ける音と、香ばしい薫り。桜のチップで燻製されているから、ほのかに桜の匂いが鼻をくすぐる。

「美味そうだな、」

「美味そう、じゃなくて美味いわよ。」

アヤカがくすくすと笑いながら、訂正した。

### その3

食材は痛み易いため、都市部でも衛生管理が大変だ。それが、外食産業が流行らない第一の理由。儲けに対してリスクが大き過ぎる。アヤカはその辺りのビジネス思考さえ変革させてしまった。

彼女が考え出した『冷蔵庫』は、この村を発祥としてどんどん周回へ広がっている。……モンスターを家畜化して利用するなんて考えは、想像さえされてこなかったのだ。

魔獣は巣を作る時に魔力で環境を変化させるが、彼女はそこに目を付けた。氷結系の魔獣を飼い、その巣穴に食料品を保管する、という方法を考え付いたのだ。

飼われた魔獣は野生の常で、腹が満たされていれば保管されている食品まで食い荒らすことはない。剥き出しにばら撒かれた餌と、頑丈に包装された食品となら、楽に食べる方を選ぶということだ。

小型の魔獣、アイス・ククルクスは兔に似た白い体毛に覆われた姿をしている。魔獣と通常の獣との違いは目で、眼球の造りが異なる為に、瞳がなく、ガラス玉をはめ込んだように見える。眼球そのものが美しい宝玉で、魔獣の瞳はくり抜いて宝飾品として使われる。魔眼石は大きいものほど価値が上がる。大型の魔獣になるほど強く、狩る事が困難だからだ。

ククルクスに関しては、兔に似た体長4〜50cmの白い獣で、二足歩行をし、スキップするように走る。特徴は額に角が一本生えていることか。この角には神経性の毒が含まれていて、突かれると痺れて動けなくなる。そうして、突き殺される。

アヤカはこの角を折り取ってから、飼う事を考え付いたのだ。ククルクスを狩る時の常套手段から一步進んだ考え方だった。麻痺毒で魔獣本体も痺れることを知って、麻痺させてから角を切り落とす。そうして、角を折られる時のダメージで魔獣が死んでしまう事を防



いだのだ。

根元1cmほどで角を切り落としたククルクスは、柵に囲まれた庭の一隅で飼われている。炭焼き窯そっくりの煉瓦造りのム口が繋がっていて、洞窟に生息する魔獣はこの窯を巢に見立て、内部を凍結する。ム口には魔獣用の小さなトンネルと木戸が付いていて、人間は木戸を使って出入りする仕掛けになっている。ククルクスが人に慣れるのだという事実は、彼女が見つけたものだった。

魔獣の餌付けはポピュラーだが、ククルクスが人に慣れるとは思われていなかった。殴れば死ぬ弱い魔獣だから、せいぜい毛皮と肉と、魔眼石くらいでしか利用価値はない、と思われていたのだ。

「ウサ公どもはどうだ？」

彼女が作ったハンバーガーを食いながら、尋ねてみる。飼育に飽き足らず、繁殖も始めたらしいと聞いていたから。

「うーん、なかなか増えてくれない。お相手選びがねー。普通のウサギと違って、選り好みが激しいみたいなのよね、つがいにしてもそっぽ向いちやってさー。」

俺は彼女の父親くらいの年代だが、まるで友人と話すような口調で返された。わずか半年で敬語や尊敬語まで使いこなせというのは酷だろうからと、ばあさんが甘やかしたからだ。

少女に対して責任を持ってない俺には言うべき資格などない。彼女の教育については口出ししないと決めている。ばあさんと彼女、雑貨屋家族の問題だ。

従って、俺が口を出すのは経営的なアドバイスのみだ。

「全部放り込んでおけば勝手に相手を選ぶんじゃないか？」

「それもダメ。魔獣って闘争本能強いらしくて、オスが多いとすぐ喧嘩始めちゃうのよね。……あ！」

何か思いついたらしい。皿を拭く手を止めたと思う間に、アヤカはそそくさと店を出ていってしまった。あの様子だと、たぶん、ククルクス飼育で何か思いついたんだろうが。

食事を途中にして、後を追う。彼女は見ていて飽きないのだ、何をやらかすのか、見当も付かない。

やはり、彼女は庭のム口に居た。柵を打ち立て、元ある柵を二つに分けている。

「今、オスは4匹なんだけど、これ、2匹づつに分けてみるわ！  
で、メスを10匹づつ放り込んでみる！」

小さな檻に隔離していたらしい2匹を放してやりながら、嬉々としてアヤカが言う。

数えるまでもなく、柵の中にはそんなに多くの魔獣は居ない。売り買いするほどには普及していないし、たぶん、近隣で借り受けてくるつもりなんだろう。つがいになつたら、残りで数を合わせて返せばいいわけで、成功すればまた同じ方式が近隣で定着するだろう。魔獣とは言え、きちんと面倒を見ているからこそ、気付くのかも知れない。オスは激しく争うが、メスは争わない、という事だろう。そういう生態を持つ獣はたしかに多い。

まったく感心する、アヤカの発想と行動力には。

「借りた個体には何かマーク付けておけよ。」

「あ、そうよね。角にリボンでも巻いておくわ。」

「それと、もしかた喧嘩が始まるようなら、柵を広げてみるといい。魔獣はテリトリーを持つ習性があるから、敷地が狭いのかも知れん。」

「わかった、ありがとう。」 沢山の白い綿毛どもに懐かれながら、アヤカが笑った。

ククルクスの一匹が柵越しに、俺の匂いを嗅いでいる。側に寄ってきただけで解かるほどの冷気を発していて、足元が涼しくなっていく。赤いルビーの瞳が光っていた。

ククルクスの繁殖に成功すれば良いサイクル商品になるだろう。通常の兎よりも柔軟な上質の毛皮で、都市部での人気が高く、加工

もし易い。生息地域が北限に近い大陸の最果てだという点、その地には数多くの危険な魔獣も生息している事から、仕入れの問題でビジネスには向かないとされてきた。

それが、彼女によって覆される日も近いだろう。

飼ってみれば、人によく懐き、病気や環境の変化にも強かった。

食料保存という、生活に重要なポストを担い、農村の必需品となれば普及は約束されたようなものだ。農作物の保存には、どこの農家も頭を悩ませていたのだから。

都市部では飼育に必要な土地の確保が難しいため、また別な方式になるだろう。とにかく、必要が発明を生み出す。冷気を人為的に創り出す、という思考が生まれた以上、発展はすぐだ。

## その4

「あ、リグ。村の皆から、ククルクスの捕獲依頼が来てるんだけど、受けてもらえる？ 時間が取れないようなら、冒険者さんの紹介をお願い。リグの紹介なら安心だし。」

後半の台詞は気遣いだ、遠慮がちな低姿勢になってアヤカは言った。

時間の都合を言い訳に危険な依頼を断る同業者は多い。最悪と名高い魔獣の生息地へ赴くなど、本来、英雄クラスの冒険者がやる仕事だからな。命が幾つあっても足りない、と思うのが普通だ。

鼻で笑うしかないな、手段なんて幾らでもあるのに。危険のない儲け話なんてないさ。

「俺はポーターだ、なんでも運ぶ。」手紙から生きて魔獣まで、それこそ何でも運んでみせる。

およそ不可能と言われる依頼でさえ引き受け、成功してきたから今日の俺がいるんだ。見くびって貰っちゃ困る。その辺を屯してる駆け出しの冒険者と一緒にしてほしくはない。

「任せて貰えるなら、俺がやる。掛かる費用はそれが一番安くなる、とだけ言っておく。だが、俺は今後二ヶ月ほど予定が詰まっているから、すぐに欲しい場合は別のヤツが運んでくる事になる。その場合も信用の措ける知人を紹介するから安心してくれていい。」

有名どころの冒険者たちは雇うのに色々と条件が厳しい場合もあるが、その辺はきちんと詰めておけば、問題なく請け負ってくれるだろう。おおよその人数、報酬、捕獲する魔獣の質と数、運搬方法。細かい部分は、任せて貰えればこっちで交渉させてもらうが。」

「うーん、よく解かんないけど、おばあちゃんに聞いておくわ。ありがとう。」

交渉事はアヤカの不得意だ、それで損をさせないようにとばあさ

んが気を配ってやらせないものだから、ますます交渉事が苦手になるという悪循環を産んでいる。

あまり良い傾向ではない、けれど村に悪人と呼ぶほどの人間は居ないから、焦る必要はないのかも知れない。なにせよ、俺の口出しする事ではないな。

雑貨屋の老夫人はやり手だ。この村に村長という役職はないが、実質で村の纏め役をしているのが、アヤカの養母であるこの雑貨屋のばあさんだ。俺がアヤカを拾った時も、最終局面で村の代表として彼女の身元引受人になつてくれた。世界中を飛び回る俺が子供の世話など出来るわけがない。ばあさんに預けるにも、村人たちの反発は予想以上に強かったのだ。なにせ悪い精霊と思われた娘だからな、ばあさんには大きな借りが出来てしまった。

本人は至つてケロリとしたものだが。

海の上を漂流していたアヤカを見つけたのは、俺が乗り合わせていた帆船の船長だ。とても目が利く男だから、小さな点にしか見えなかった彼女を誰より早く見つけ出した。

こういう場合は、荷物でも何でも、見つけた人間のものになる。けれど、なにせアヤカはあだから。言葉も通じない、常識も知らないような女はすぐにお払い箱だった。いくら美人でも木偶人形は要らないと、俺に売りつけてきたんだ。港街で売ってくれ、と。

アヤカは俺に助けられたと思つている。

本当のところは、都市部の売春窟へ連れていけば高値で捌けると思つて買ったわけだが……今となつては、決して言えない秘密というヤツだ。

彼女はたった半年で、この国の言葉や習慣を覚えた。いや、教え込んだばあさんが凄かつたんだろうが。

アヤカを自由にしてやったという名目で俺が船長に支払った代金は25000G。自由にしてやった、というのはばあさんが彼女にそう説明したからだ。アヤカは、俺が純粹に善意だけで助けてくれ

たものと思い、必ず返すと約束した。……やり手なばあさんのせいで有る時払いだ。

返ってくる見込みは薄いが、彼女の仕掛けたウサ公ビジネスが軌道に乗ればトントントンどころか大きな儲けになるだろう。そういう理由で、今のところ俺に文句はない。

「二ヶ月、てコトはまた冒険？」

「俺は名誉だとかに興味はない、金儲けに誘われたただけだ。無理だと思えばさっさと引き返してくるから、そうしたら前倒しでこっちの依頼を請け負いに戻って来る。」

アヤカは冒険者とその他の職業の区別が付いていない。他の連中なら途中で諦めるような事柄を、意地と功名心でなんとかしてしまっうのが冒険者という奴等だ。運び屋稼業の俺でも冒険に近い事は幾らもやっている。けれど、冒険者の冒険と他の職人の冒険ではまるで性質が違うものだ。

それぞれの職業には形だけでも便宜を図る組合のようなものが存在しているが、国境を越えれば関係のなくなる話だ。大陸にあるレイティア聖騎士団領、勢力を二分する新・旧帝国領、そしてここリユース連合国。世界に影響を与える四大国家のいずれかに属するメジャーな組合に普通は所属する。

後は大小さまざまな王国が乱立しているが、そういう国の組合は弱小で世界を股に掛けた活動には何の利益ももたらさない。国境を越えるたびにその国の組合に赴き、紹介状を取りつけ、活動の拠点として情報を共有する為の許可を貰うんだが、バックが強ければそれだけ恩恵も大きいという事だ。

情報を得るために利用することが主となる組織であり、専属の冒険者や強国の組合所属の冒険者などは優遇されるし、優先的に現地での仕事の斡旋を受けることもできる。大陸ではギルドと呼ばれていて、どんな職業にも専門のギルドが存在する。経済の安定は、各種ギルドの力に拠る部分が大きい。

海運方面で多くの船団が所属するレイティア・シーポート・ギルド、規模の大きい有名なギルドだが、そこに所属している古くからの知人に紹介された仕事だ。新規ルートの開拓だとかで、難関と言われる西回りに挑む連中が居る。誘われたから、二つ返事で引き受けた。ここへ来る船に乗る直前のことだ。

西回りで新大陸を周回した者はまだ居ない。成功すれば大きな富と、新たな世界地図を手に入れることが出来るだろう。新大陸の、白紙になっている半分を描き込むことは大変な名誉であり、商機だ。「新大陸には香辛料の一大産地がある。海峡の関係で大きな船は向かうことが出来なかつたが、西回りが確定すれば、一気に商人が向かうようになるだろう。大船団を組んで。……ハーブや胡椒なんかの値段が安定するようになるんだ。」

今はべらぼうに高価で希少な嗜好品が、多少は安定して供給されるようになるという事だ。値段的にはそうそう値崩れるほどの変動は起きないだろうが。

## その5

「胡椒が安くなるのね？ 嬉しい！」

目を輝かせてアヤカが応える。

料理を作る時にふんだんにばら撒いて、ばあさんにこつ酷く叱られた事のあるアヤカだ。彼女の国ではパンを買うよりも安い値段で香辛料が買えたそうだが、それはどんな黄金郷なんだか。いつかは行ってみたいものだ、きつと大儲けが出来るだろう。勿論、彼女には決して他人に口外しないようにと厳重に言い含めてある。悪党が嗅ぎつけたら厄介な事になるのが目に見えている。

この店には俺が優先的に香辛料の類を取り寄せている。だから、実際にはとても貴重でそうそう入手出来るような品ではないという事を、彼女は知らないままだ。

アヤカの作る料理は美味い。その美味しい料理を食うためなら、多少の無理は通していいさ。

何時でも何処でも安定供給が約束されている食品など、実際は数えるほどしかない。塩、砂糖、ワイン、スープの許となる家畜の骨ガラ。それと、何処にでも生える一部のハーブ。アヤカにコンソメのキューブだとかの商品を求められた時には耳を疑ったが、スープは各家庭で作られている物で、売っているものじゃないと思っていたし、それが常識だと信じていたのに、一気に打ち砕かれた気分だった。

暖炉に大鍋を掛けて、その日に出た屑野菜と骨ガラを適当に放り込んで、一晚中煮込んでおけば朝には一日分のスープが出来ている…… そういうものだと思っていた。

アヤカが求めた商品は、一般で知られる常識的な数々の手間が一切省かれた工業製品としてのスープだ。そんな物が実際に存在する、いや、その発想に驚かされたものだ。



「毎日作るなんて面倒臭いなあ。コンソメキューブがあれば、五分でスープが出来るのに。」

アヤカが話す言葉は魔法のようだ。この世界にあるどんな魔法より不可思議だと思うのに、彼女は首をかしげるだけで、この方がよほどにワケが解からない、と言った。

二ホンという国はきつと黄金で出来ているんだろう。

柵の仕切り造りを手伝って、ついでに緩んでいた杭を打ち直す。二つに分かれたウサ公のグループはしばらくの間、仕切られた柵の周りを行ったり来たりしていたが、そのうちに落ち着いていた。

よちよち歩きで綿毛たちが身体を揺らしながら行進している様を見ていると心が和む。うまい具合にオス同士も警戒を解いたようだった。後は、メスを足して全体の数が増えてもこのまま落ち着いているようなら、ひとまず成功と言えるだろう。

「ありがとう、リグ。あ、ご飯は食べ終わったの？ 後片付けしなきゃ。」

「ああ、そっぴや食ってる途中だった。」  
すっかり忘れていた事柄を思い出し、ついでにそこから連想される或る事態も同時に思い出した。

まずい、無人の家屋に食い物を放置していたら奴等が来る。

「駄目よ、それはあなた達のじゃないってば！」

入っていきなりアヤカが叫ぶ。

慌てて戻ったが、時既に遅しだ。食いかけのハンバーガーは解体されて、フェアリーどもに運び去られようとしている最中だった。きや、だの、わ、だのの小さな悲鳴があがる。

腕を回して追い払ってみたが、この連中は人間を恐れないから無駄だ。ケラケラ笑いながらパン以外の全ての食材を持っていったまう。入ってきたと同じ、大きく開いた三つの窓から。

妖精は魔族の仲間とされてはいるが、学会では未だに意見が割れ

ている。魔獣と分類するべきか、その目安は知性だが。他の種族と交流を持ちたがらないため、どの程度の知性があるのかは不明だ。

フェアリーの生態というものも謎に包まれていて、本当に連中がレタスやベーコンを食うのかは解かっていない。ただの悪戯だとする説もある。

どっちにしろ、俺の昼飯は奴等に盗まれてパンだけになった。

「なんか……ごめんね、リグ。ほとんど食べてないよね、もう一個作る？」

「いや、いいよ。ばあさんの厭味は聞きたくないしな。」

気を使ってくれるアヤカに、笑って答える。客の落ち度に一々弁済なんてしてたら大損だろうに。

フェアリーに昼飯をかつぱられるなんて、どれだけのマヌケなんだか。連中はそれこそ、海の上以外はどこにでも生息しているから、よほどに気を付けなくてはならない。それでも、フェアリーモドキと呼ばれる別種の魔獣よりはマシだが。モドキの方は生きた獲物を狩るからな。フェアリーだと思って油断をしていたら、食われる。

アレはむしろ昆虫の仲間で、北に行けば居なくなるらしいが、この辺りは生息域だから要注意だ。アヤカにも、何度となく村の誰かが教えているがそれでも不安に思う程だ。そのくらいモドキの方は恐ろしい魔獣だ。魔獣といえはウサ公くらいしか知らないアヤカが、これを同じに思わなければいいんだが。

放たれた攻撃魔法さえ吸収して養分にする恐ろしい敵だ、肉食でおよそ何でも食う上に擬態をするため、何に化けているか知れない。食えば食うほど巨大化するアメーバ生物。最初はフェアリーに姿を似せることから、フェアリーモドキと呼称されるに過ぎない。

畜産業に大打撃を与える天敵だが、対抗手段がないわけではない。

ここらの牧場はみな魔性オレンジを植えているが、あの樹が発する防虫成分がモドキには有効だ。棘だらけのあの低木が街中至るところに植えられているのはそういう事情だ。

自然は巧い事出来ている、複数の生物層が三竦みの状態になることで一部の生物のみが異常に繁栄しないようにバランスを取っている。フェアリーモドキは手に負えない魔獣だが、生息域に覆い被さるように生い茂る魔性オレンジの為に繁殖が阻まれている。オレンジが生えない山間ではモドキを捕食する魔獣も居る。そんな風に、生態系の多様性は保たれている。

魔性オレンジは味がキツく油分が多く食用には向かないが、オイルを絞って加工するには向いている。オレンジ・オイルは何処でも取れるため、商品にはならない事がネックだが。

## その6

アヤカの住んでいた国には、魔族や魔獣は居なかつたらしい。そんな奇跡のような土地が本当にあるんだろうかと疑りたくなるが、事実、彼女の知識は俺の知ることとは違っている方が多い。

魔法も存在しないと言っていたが、必要性がないために発現する機会がないという事だと思う。脅威がないなら、魔法という技術そのものが危険なバランスブレイカーになりかねない。

彼女の国では環境レベルでのロックが掛かる事で、無駄に強い力が働いて生態系のバランスが崩れることを阻止しているんだろう。

大いなる意思というものは確実に存在すると、リアリストの集団である魔道士ギルドでさえ認めている。

アヤカの知る知識は、正直、俺の想像のはるか彼方だった。

大地が丸いことは知っているが、空に浮いているだとか太陽がとても遠くにあるだけで本当はとてつもなく大きいのだとか。その辺りの話を聞いていると頭が痛くなってくるくらいだ。

この大地が動いているのが本当か、太陽の方が動いているのが本当か、大した問題でもないんだが。

レイティアの保守派聖教徒じゃあるまいし、今どき世界を神が作ったなんて話を真面目に信じている者など居はしない。多くの魔道士が寄つてたかつて神学の成り立ちから歴史の変転に至るまでを暴いたせいで、宗教の価値は暴落したのだ。聖騎士たち本人が、経典の内容を信じてなどいない。

『知識の源泉を求めるとは、魔道士たちの飽くなき探求心から逃れ得るものは只一つの例外もない』とは、有名な魔道士ギルド創設者の言だ。イカれているとしか思えないほど頭の良い連中が考える事など、凡人に過ぎない俺に理解出来るわけがない。

アヤカの持つ知識は、そういう類のものだった。

店のカウベルが高い音色を奏でる。来客にアヤカが振り返った。

「リゲ！ 戻ってきてたの!？」

艶のある赤毛を美しくセットして、この片田舎に似合わぬ派手なドレスを着た女が立っていた。

いや、まあ、知人に向かって「女」はないか。イザベラだ、寄港した港町の酒場をテリトリーにしている売春婦で、何より彼女を優先しようという馴染み客が何十人と居る。俺も、彼女の多数いる情夫の一人だ。ドレスに恥じない美しい女は、この近隣すべてを含めてもNo.1と呼び声の高い高級コルガールだったが、今この場の空気には微妙にそぐわない。

「なんでこの村に居るんだ？」

「ヒドい台詞。」俯き加減の上目遣いが色っぽい。「あたしこの村の出身なのよ。年老いた母に仕送りしてるの。今日は久しぶりに顔を見にきたのよ。晩御飯を作ってあげようと思ってお買い物に出たら、可愛いお店を見つけて……中に貴方が居るんだもの。驚くじゃない?」

イザベラは意味深な視線を投げて、俺の腕を軽く撫でた。

さりげない仕種で男の身体に触れ、期待を引き出すのはこういう女の常套手段だが。彼女は他の同種の女以上にタイミングと演技が巧い。解かっているにも悪い気はしなくなる。

言葉とは裏腹に、わざわざ追いかけてきたんだろう、という都合のいい妄想さえ抱かせるのだ。

商売柄というわけでもないだろうが、イザベラは男に甘えるのが巧い。仕送りが本当かどうかは別にして、聞き捨てるわけにはいかなかった。

「母親に仕送りか、殊勝なことだな。足りているとは思うが、良ければこれも渡してくれ。気持ちだ。」

「あら、やだ！ ごめんね、催促しちゃったみたい。そういつつも

りじゃなかったのよ？」

あからさまな期待の眼差しで、イザベラは俺の渡した小袋を両手で受け取った。俺が、たいてい貴重な薬の類を携帯している事を知っているからだ。

「ある種の魔法がかけられた傷薬だ、大抵の傷なら癒すから重宝するだろう。不要なら売ってくれ。」

「お母さん、喜ぶわ。……ありがと、リグ。帰るまでに必ず連絡してね、待ってるから。」

熱の籠められた眼差し一つで、満足した気分を得られる。

男特有の、くだらない見栄だ。

視線を感じて振り返った。

アヤカは俺に背を向けていて、窓際に置かれた花の手入れをしている。別段、変わった様子もない。

こう、突き刺さるような危険な感じがしたが、気のせいかな。

「お嬢ちゃんに妬かれたみたい。お暇するわ、じゃね、リグ。」

誰に気を遣うのか、イザベラは小声で再び「待ってる、」と囁いて、俺の腕を離れた。

アヤカに？ 馬鹿なことだ、ここまで来たら守備範囲外だ、バードマンは節操がない事で知られるだろうが、俺はまだ良識派だ。子供に手なんぞ出すか。

俺が大金を払ってアヤカを買った事を悪し様に言う者が居て、噂が一人歩きしている感がある。女にもなっていない子供を愛人にした、などと実しやかに囁く声があり、随分と迷惑しているのだ。

「目の前でイチヤイチャしちゃってさー、サイテーよねー。ふーんだ、ドーせね、あたしは子供にしか見えませんよーだ。12歳だなんて勝手に決め付けてくれちゃってさ、日本人は若くみられるだけで、ほんとは16歳ですよーだ。ばーか、リグのばーか。」

……またアヤカが異国の言葉でなにやら話し込んでるな。

かすみ草は枯れた花の処置が大変だから、愚痴でもこぼしてるんだろうが。

さっぱり意味が解からんが、俺の名前が出たような気がする。止めてほしいんだがな、被害妄想に近いだろうが、どうにもいい気がない。

在りもしない無責任な噂は、彼女にとっても迷惑な話だろう、今は子供でもじきに成熟した女になる、その時に良縁が逃げたらどうしてくれるんだ。

## その7

雑貨屋の、元は主が使っていた部屋を借り受けて一夜の宿とする。餌は時いてやった、今夜でなければたぶん明日の昼間だろう。アヤカが存在がネックになるかも知れんが。

彼女がこの世界にとって非常に有用であるという事は、各国上層部の人間にはとうに周知となっている。両帝国の実質支配者である六公および三家、連合国評議会、そしてレイティア十二騎士と王家。不可侵の条約が秘密裏に取り交わされ、連合国が保護する彼女の動向を見守っている。利益は世界に還元される、という誓約のもとに。

あの日、波間に漂っていた少女にそれほどの価値があるとは、当初は誰も予測し得なかった事だ。一般にまで知れ渡るところとなる前に、取るべき処置は取られた。

連中がアヤカを危険に晒すとは思えない、だが用心は必要だ。愚か者は思わぬ場所に潜んでいる。

目を閉じ、眠ったふりで息を殺す。

仕掛けるチャンスはこの航海中しかないはずだ。次に首都へ戻った時には正式に少将に任じられ、俺にも護衛が付くだろう。そうなれば、国家の威光に関わるという意味になり、襲撃そのものが困難となる。俺が一介の市民に過ぎない存在であるうちに、連中は俺を排除するために動く。

俺がメイヤー提督と組むことをなんとしても阻止したい連中が、ここ一年ほどの期間に渡り、刺客を放ち俺を付け狙ってきた。提督には厳重な護りがあり、狙うなら一介の商人に過ぎない俺の方が暗殺出来る確率が高いと踏んでのことだろう。

貴族同士の派閥争いなど知ったことではないが、肅清の為の段取りと言うならば協力せざるを得ない。提督の敵はいずれ俺の敵にな



るのだから。邪魔者を排除したいのは、こちらも同じだ。

レイティア聖騎士団領、首都サザングラード。古い名君の名を冠するこの都市は、山岳と湾岸の多いこの国での数少ない平野の一つに存在する。四大国家の中でも最大級の規模を誇り、王城は壮麗を極めた。

現在は十七代、エリザベス・レイティアが在位している。

名称上は騎士団領であるが、実質は王国だ。レイティア王家を取り巻く十二の名門貴族が実権を握っている。

今回の連合国方面への渡航手続きを行っていた頃、ちょっとした事件が起きた。俺の乗っていた船が炎上、大爆発を起こしたのだ。

どこぞの商人が積んだ大量の火薬に、自然発火した別の積荷が引火……表向きはそうのように処理された。

「じいさん！ 叙勲式でも何でもいいが、早く済ませてくれ！ いくら俺でも身が保たん！」

特大の爆風からなんとか逃げ延びた俺は、即座に抗議行動に出た。事故では俺以外のクルー全員が死んだのだ、たまったものじゃない。「まあ待て。慌てる乞食は貰いが少ないと言うぞ。まだまだ証拠としては説得力に欠ける、この程度では聡明なる女王陛下を味方に付ける事は出来んだろう。奴等が焦れば焦るほど都合というものだ、もつと鼠に齧らせてやれ。」

飄々とした老軍人が、人の悪い笑みを浮かべて俺の苦情を握り潰した。

「商工会の連中が聞いたら殺到するぜ。俺以上に腹が煮えているだろうからな。」

実際は、ギルド幹部クラスの大物バイヤーたちは、先刻承知のことなのだろうが。

マイヤー提督との密約が、どういふ経路か敵陣に漏れ聞こえたらしく、俺の周囲はにわか騒がしくなった。俺がじいさんの養子になる見返りとして、レイティアの商工ギルドが全面的にマイヤー卿をバックアップする、という取引が行われたのだ。俺は商工ギルドと一部貴族を繋ぐパイプ役となる。

貴族に仕切られていた国政に、いよいよ商人たちが口出しを始めようということだ。対立する貴族たちが黙っているはずもなく……俺はその日から命を狙われる事になった。

様々な思惑が絡み、水面下での工作が続く。仕掛けられた謀略の為に、俺の、女王陛下への謁見は先延ばしにされているのだ。従って、俺は提督の養子であり海軍将校でありながら、護衛が付かない正式な任命が為されていないために。

ままと一杯食わされた。老獪な狸どものせいで、今の俺は生餌同然の扱いだ。

首都にある三つの商工会を束ねる長、オースティンが段取りを整え、俺に白羽の矢が立った。純粹の魔族ならば、そうそうは死なないだろう、という一点で。実際それだけという話でもあるまいが、その点が大きいことに違いはない。何の魔力も持たない普通の人間種よりは、魔法が扱える分だけ魔族の方が生存率が高い。もっとも危険な橋を渡る役目を負うポーターを、連中は探していた。

まったくもって迷惑な話だが、同時に魅力的な儲け話でもある。じいさんは国政に影響を与えるに足る潤沢な資金と商工ギルドの協力を、俺は騎士団領および近衛海軍という強力なバックボーンを、それぞれ、得る。

昔から付き合ひのあるバイヤー連中はさすがに呆れていた。

儲け話に危険は付き物、とは言いが、少々危険度が過ぎているかも知れん。

純血の人間は魔法を使うことが出来ないらしい。なぜ使えないのかは解からないが、そもそどういう理屈で魔法が発生するのかさえ解かっていないのだから、気にするだけ無駄な事だ。魔道の成り立ちや概念といった類は、お偉い魔道士連中の専売特許、一生を費やして研究室に閉じこもるような変人どもに任せておけばいい。連中の頭脳で解からん事柄が、連中に丸め込まれる市井である我々に理解出来るわけもない。

その男はいつ洗濯したのかと思えるほどに薄汚れたローブが気に入りで、いつも身に纏っていた。

「いいかい、リグ。魔法が使えるのは魔族と、その亜種である混血……多くは人間種との合いの子だけだね、それと魔獣の類だけなんだ。純血の人間と、混血でも人間種の資質を多く受け継いだ者には魔力が扱えない。普通の動物にもね。元々魔族は人間種からの派生で生まれたものだ、生物学上の違いはほとんどない。君が隠す翼も、些細な相違点でしかないよ。我々は大きな意味でまだ『人類』なのだ。」

旧帝国領で引きこもりになっている知人が居て、俺には理解不能な専門分野の話を嬉々として話した。

優れた魔道士だが、変人で、書籍と研究にしか興味がない男だ。頭の良い人間など得てしてそういうものだが。メイドを一人きり雇ってアパートメントに閉じ籠り、魔法の研究ばかりしている。ぼさぼさの髪はかろうじて蚤虱を湧かせるほどではない程度には管理されていて、雇われたメイド嬢の苦勞が知れる。

「へー、」

ほとんど興味が持てない話題だ、俺とヤツ……ルーヴェエとの会話

はたいてい平行線になる。

「掛け合わせに法則性が隠されているとも言われるが、まだまだ研究途上だ。我々はたった一つの種から発展、分岐して現在の多様性を手に入れた。課題は遺伝形質の不安定さだね、優れた資質をそのまま子孫へと継続させる事は出来ないとされている。」

遺伝子の配列でどのような形質が伝達されるかが決定されて種族的な相違点に結び付く、だとか、そういう小難しい話題になって、その時も逃げてしまった。

残念そうにしていたが、波動がどうの電磁波がどうのなどという話が俺に解かるわけもないだろうに。

彼から聞いた話では、魔獣と一括りにされている中でも一部には学術的に同種とは認められないモノがあるらしい。この世界はとかく魔獣だらけだが、その魔獣たちも人間から魔族が発生したように、突然変異的に他生物から派生したものと認識されると言っていたが、それとも異なるグループが居るらしい。

海には化け物烏賊の親玉としか言いようのない怪物、グリーン・ビショップがいる。空の覇者はドラゴンたちだが、それとは別に未確認とされる飛行生物が目撃されている。それが、クトウルーといわれる怪物だ。俺は、幸か不幸かお目に掛かったことはない。

アヤカと同じように、ニホンという国から来たと言う純血の人間種が三十年ほど昔にいたそうだ。アヤカの事を話していた時にルーヴェが言っていた。その人間のもたらした知識を元に、魔道概念は大きく飛躍したのだという話だった。未確認生命にクトウルーと名付けたのは、その人物らしい。

アヤカ同様の知識を持っていただろうに、保護された場所が悪かった。旧帝国は魔道士が幅を利かせているから、市民に有用な方面よりは専門学的に価値のある方面ばかりが求められた。

お陰で現在、アヤカの『冷蔵庫』に期待が寄せられているわけだ

が。帝国を發祥として広まった技術には、測量、火薬、科学概念などがある。鉱物分野では特に鋼はがねの精製方法が後の發展をもたらした。当たり前前に普及しているガス灯も、その人物からの伝来だ。

愚か者はどこにでも居る。その人物は、渡来して5年目の秋に、殺された。

既得権益という甘い汁を吸う輩には一切の期待を抱くべきではない。人類全体の發展よりもごく一部に過ぎない己の周辺だけの榮華を選択する。かつての騎士団領もその例に漏れない国だった。

歴史の潮流、幾度かの内戦を経て領地を広げた大貴族たちは、上級貴族と名を変えて軍部さえ牛耳った。それはどの国にも起きえる腐敗の構図で殊更珍しくもないが、時流は緊迫へと向かいつつあった。三強国が次々と軍事改革を打ち出すなかで、上級貴族の頑迷さと保身の為にこの国は軍事力の面で他の三国に大きく立ち遅れることとなったのだ。軍事費の増加に反対したのは、一重にわが身かわいさだ。

レイティア王家、現女王陛下は若干15歳で即位したが、歳に似合わぬ聡明さで知られる。旧守のしきたりを廃し、革新派貴族を多く登用し、宮廷改革を断行した。

これを皮切りに、軍事費は大幅に増大し、軍人も大增員……上級貴族はこれを恐れていたのだが。

マイヤー提督を筆頭に、多くの海軍将校も登用された。騎士団領では下級貴族が軍人を兼ねる。その下級貴族の大部分は、商家の子弟でもあった。以降、大地主対商人の対立は激化していく。

俺たち商人にとって、自由貿易の妨げになる大地主などという存在は、文字通り目の上の瘤なのだ。

三十年前、一人の異邦人がもたらした技術革新が世界情勢さえ変

革した。軍事力強化に流れた世界から騎士団領は取り残されようとしていた。

軍部が力を持つことを恐れた旧態貴族の愚かな思考が、騎士団領と残る三強国との格差を広げ、この国を危機的状況に立たせたのだ。富国強兵策は必然であった。

どうあっても俺を殺したい連中がいる。

このまま無為に過ごすだけで権威を失墜させる旧守の貴族たちの最後の足？きだ。犬と呼ばれる子飼いの傭兵や暗殺に特化した職人を雇ってでも、改革の流れを堰き止めたいのだろう。

今回の航海は旧守一派への誘い水だ。実働部隊のアサシンたちはこれが罠だという事くらいは重々承知だろうが、雇い主が彼らに釣り合う明晰な頭脳の持ち主ばかりではない点を突かれた。

互いの陣営は駆け引きに長けた物の怪揃いだ、時流はこちらに味方している。

あからさまな罠を見破ったとしても、この機会は逃せないはずだ。いつ、仕掛けてくるか。

微かに、空気が動く。風の流れが何者かの侵入を告げる。肌にならずかに触るほどの揺れが。窓からの明かりは薄い闇を作り、月の加護は真の闇を消している。迎撃者には幸運を、侵入者には不運を。

## その9

蒼い闇の中、息を潜めて待つ。

タイミングを読んで毛布を跳ね上げた。

視界を遮られた襲撃者の一人が怯む気配。毛布を挟んだ向こう側に居る。もう一人、俺の背後。

同時に飛び込んできたか、

リーチはこちらが長い、前方へはスナップを効かせ遠慮のない蹴りをお見舞いし、続けて背後の相手に意識を移す。

こちらは怯んでいなかったか。振りかざす刃は危険な色合いの光沢を放っている。恐らくは毒。

咄嗟に身をかわし第一撃を辛うじて防いだ。

毒の刃は俺が寝ていたベッドを深々と刺し貫く。間髪入れずにいきなりで両翼を開いてやる。

翼に打ちつけられ、ナイフを握る手が離れたところを振り返りざままで思い切りぶん殴った。

これで終了、割とあっけない……いや、本命が別に居た。

外に居る。凄まじい勢いでカウントが始まる、同時に俺は窓から外へ飛び出し、気配の元へ。

片隅に数字が見えるのだ、思考の隅に黒い領域がありそこに白く二桁の数字が浮いていて、読み取ること困難な猛スピードで繰り上がっている。カウント、パーセンテージは100へと向かう。

同調率イメージが頭の片隅で数値を積み上げていく、丸いグラフは見る間に真円へと近付き、同調が完了する猶予すら伝え始める。

心音が二重に感じられ、耳が塞がれたように全ての物音を受け付けなくなる。しじまの様な耳鳴り。

敵のアサシンと俺の意識が同化を始め、見えるもの、感じるものが重なっていく。これが、同調。

醜悪な敵の内面が俺の意識に流れ込んでくる、殺戮の喜び、生への嫉妬、憎悪、……吐き気がする。

反転した俺の、覆い隠した負の感情だ、狩猟の高揚、死への憧憬、畏怖。敵にも同じものが。笑い出したくなる、いや、互いに嗤っている。凶暴な歓喜が相手の残酷な死を望む。

走るのもどかしく、両翼にありったけのパワーを籠め一気に距離を縮めるべく羽ばたく。

低空飛行の、俺の限界スピード。グラフの完成より早くターゲットを捉えた。

樹の茂みに隠された枝ぶりも、同調した今ならば手に取るようにその配列が解かる。二段目、居た。

感覚が共有されている、互いの殺意が同調し、一つに重なる瞬間に突入。

脳髓に焼けるような痛みが走り、同時に俺の手は腰の得物を掴み鞘を払う。

焼き切られる前に、殺る……！

視神経がブラックアウトした、目に映る世界は反転した映像となり、アサシンの見る世界が見えた。

迫り来る自身の姿が白黒反転した鏡のように視界に映りこむ。

その虚像に向け、抜き身の刀身を突き出した。

肉に突き刺さる感覚、ずぶりと沈みこむ、斬られる側の感覚を肌で感じ取る。ぞくりと身が震えた。痛みが。感覚が。突き刺す側と刺される側の、両方を同時に体感した。

直後。

脳に直接送り込まれていたダメージが消え、敵のアサシンが樹上から落下する。

俺は興奮状態に陥っている。感情を無理に抑え付けているためか、右手がわなわなと震えていた。膨張するどす黒い感情を持って余している、下に落ちている死骸から貰った置き土産だ。



暗殺者だけが使う特殊能力がある。「死神の瞳」<sup>スベル・オラ・デス</sup>という技だ。ターゲットと同調<sup>シンクロ</sup>することで、相手の脳組織を破壊するという恐ろしい技能。

シンクロした意識を殺す魔法なのか、念動力の類で物理的に脳髓を破壊するのか、それさえ知られていないが、対抗手段は一つだけだ。感覚を研ぎ澄ませ、相手の思考に近寄っていき、同調が完了するより先に同調者を殺す方法以外にない。他者は手出し出来ない、技の使い手は気配のみでなく存在を消し、文字通り『死神』になるからだ。その仕組みも判然としない為に厄介極まりない相手とされている。

ギリギリの駆け引きを必要とする、危険な戦い。相手の思考に近寄っていくという事は、相手と同調するという意味だ、シンクロ率が上がっていく中での一瞬の差が勝負を決する。

双方共に強制的に極限の精神状態に置かれる諸刃の剣。今回はたまたま相手が似たタイプだった、これが醜悪な精神の持ち主なら、生き残ったとしても過酷な精神ダメージを食らっただろう。

キチガイのような敵と同調して、廃人となった英雄を知っている。

アサシンの中でも特に優れた資質を持つ者だけが獲得出来るという噂だが、実際のところは知られていない。

アサシンは秘密結社ともいべきギルドに所属しており、アサシンのギルドの秘匿性は並大抵ではないからだ。各国の諜報機関が何度となく攻略に挑んでいるが、その組織の全容は依然として知れていない。

敵も本気だ。

死神クラスのアサシンを雇うなら、その対価は相当な額だろう。

多く善良な騎士や商人なら殺れたのだろうが、残念ながら俺は規格外だ。

凶暴さで知られるバードマンは、アサシンの精神性とはむしろ近

し  
い。

## その9（後書き）

脳髓破壊系、なるうでは見たことないんで伝わるか不安。  
ちよつと字数減らして後ほど改定予定。

見慣れない戦闘は想像が難しいよね、ということぞ。

も一度改訂予定。

とりあえず片は付いた。死体をそのままにはしておけない、死臭は魔獣を呼びこむ。慎重に近寄り、生死を確認するために距離を持ったまま頭部に光弾を放った。脳を貫かれてもピクリともしないという事は、確実に死んでいるという事だ。

改めて、アサシンが身を包んでいた黒衣の端を掴み、引き摺っていく。

納屋にでも放り込んでおくか、アヤカには見せられない。

「リグ！」

仁王立ちのばあさんに出迎えられた。つい身構えてしまうのは、相手が相手だから仕方ないだろう。大人しくばあさんの言葉を待つ。

「ここには厄介事を持ち込んでくれるなど言っただはすだよ。」

「ああ、……すまない。」

凶暴な魔族である俺でさえ気圧される迫力、やはりばあさんは本物だ。怖え。

体内で警戒のシグナルがガンガン鳴り響いて煩いくらいだ。

並の軍人程度なら歯牙にも掛けない俺だが、無力な人間種にも幾許かは警戒を持たざるを得ない者が居る。その中の更に一部には畏敬を抱かされる者さえ。その一人が、この雑貨屋のばあさんだ。

そもそも、このばあさんでなければ安心してアヤカを預けたりはしていない訳だからな。

ばあさんは元海軍将校だ。それも、上級貴族将校の飾り物上司の元で生き延びてきた猛者だ。今でこそ上級貴族も優秀な軍人がほとんどとなっているが、このばあさんが現役だった頃は酷かったと聞く。

革命の危機に晒されて、さすがにボンクラを送り込むような余裕

は失われたのだ。現状では、軍人たちの能力に上級・下級の差はほ  
ぼない。

いくら環境が違えど、同じ人間種だ、程度の差など微々たるもの  
だという証明だろう。ふんぞり返るだけで勤まるほど、貴族という  
職も甘いものではないのだしな。

当時の軍人職というものは、上級貴族にとっては厄介者を放り込  
んでおくに打ってつけの場所だったという事だ。無能でも勤まり、  
それなりに箔も付く。

今では、貴族の無能者も平民のそれと同様、冷や飯食らいが関の  
山だ。我が子に優秀な者がなければ、どこぞから養子を取る。そこ  
までしなければ家の存続が危ないとされる時代だ。平凡な息子より  
は無能な娘のほうが尊ばれている。

「じーさまが残してくれた大事な思い出の土地だ、荒らされたくな  
いんだよ。」

「解かっているよ、済まなかった。」

「ばあさんが、ここ、連合国に居付くきっかけとなった話は飽きる  
ほど聞かされた。」

開拓者となつて、故郷も地位も何もかもを捨てて、今は故人とな  
ったじーさまと手に手を取って、だろ。聞き飽きたよ、その話は。」

「あんたくらいの歳の部下が入れ替わり立ち代わりやって来ちゃあ、  
脅したり泣き落としたり……挙句の果てには大事な畑に火を放った  
奴まで居たよ。それでも守り通してきたんだ、ようやく落ち着いて、  
これからは楽隠居と洒落込もうかって段になって、今度はアンタが  
特大級の厄介事を持ち込んできさ。」

知らないだろうが、あの子をつけ狙う他国のスパイはひっきりな  
しだよ。天才なんだろう？ あの子。」

変わった娘だという事は確かだが、多く優秀な魔道士がそうであ  
るように、変わっているという事は才能の裏付けでもあるのだ。

三十年前の事件のように、あまりに都合の悪い発明を行うような

らばいつそ、と考える国は多い。

急激な変化は、それが例えどれほど優れたものであっても、歴史には望まれないものなのだ。必ず造反する勢力が現れ、時流に逆らうものであれば、その時に費える。

便利な技術は誰もが欲しがらる。ただし、そこには利権が絡み、片方で莫大な損害を蒙る者が出てくるのだから、買う恨みもまた甚大だ。

頭の良い魔道士連中でさえ、新技術に浮かれて足元を掬われた。嚴重な警護を敷いていたのに、彼等の庇護するニホン人は殺されたんだ。旧領が犯人と目した、新領との関係は未だに修復不可能なほどに悪化したままだ。

アヤカを守るためには、田舎町の片隅で埋もれさせている方がいい。

「あー、ばあさん、腰はもういいのかい？」

「誤魔化すんじゃないよ、」

失敗か、どうにも苦手なんだよ、このばあさんは。

「アヤカに聞いたけど、明日、あの子を連れ出すつもりだそうだね？ 大丈夫なのかい？」

「ああ、薬草の採取を教えておいてやるうかと思っただが……、拙かったか？」

俺が離れていた半年の間に、何かあったらしい。ばあさんの表情が曇る。

「いやね、気のせいだとは思っただが……ドラゴンがね。」

この村に竜族の者が住みついたという話は聞いていたが、何か動きがあったようだ。ドラゴンはよほどの事がなければ、一つの場所に定住はしない。

気ままに空をゆく旅人に過ぎないが、彼らはもう一方に歴史の監視者としての役目を持っている。

アヤカには、彼等の中からボディガードが付いた。例のニホン人

の時にはなかった事だ。

「ドラゴンたちは、何かをあの子にやらせたいらしい。だが、たぶん、それはとても危険なことだよ、出来るならそんな真似はさせたくないもんだが……。あんたも、しっかり含んでおいておくれ。」

思いがけない事態だ、なんで竜族にアヤカが目を付けられなきやならん？

隠していたはずなのに、なぜ……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1494w/>

---

金融王の旅団【お題スレ】

2011年10月1日03時23分発行